「祈りの道」再生へ

気仙三十三観音

〝心の拠り所〟復活願い

霊場再興プロジェクト 巡礼マップ、HP作成も

ひとさじの会

被災地住民の〝心の拠り所〟復活を願い、東京都内の僧侶らでつくる団体が気仙三十三観音霊場の再興プロジェクトを立ち上げた。霊場の中には津波によって壊滅的被害を受けたところもあるが、被災地に住む人たちの寄る辺となる「祈りの道」を再生することで、心の支援につなげたい考え。第1弾として巡礼マップの発行やホームページの作成に着手する。

この団体は、社会慈業委員会「ひとさじの会」(東京都台東区、会員30人)。食べるのに困っている人へほんの一匙(ひとさじ)の重湯(おもゆ)を差し出すような支援や、寄り添いたいと想う僧侶たちで平成21年に設立した。主に地域社会やNPO団体と協働してホームレス支援など社会的弱者の支援活動を行っている。

同会では、震災発生から1年以上にわたり大船渡、陸前高田などの避難所や仮設住宅で炊き出しや子ども会などの支援に携わってきた。

その中で「亡くなった人に祈りをささげる場がほしい」「心静かに手を合わせ、ほっとできるところがほしい」などといった声が聞こえてきた。

活動を通して観音堂の存在が、地域の人たちの心の拠り所だったことが分かった会員たちは「その声はもともと日常の中にとけ込んでいた〝祈りをささげる場〟を求めている声ではないかと直感した」という。

気仙地方では古くから気仙三十三観音霊場の巡礼が行われており、地元に親しまれている。観音霊場の中には、津波によって堂宇や伽藍に壊滅的な被害を受けてしまったところ、幸いにして観音菩薩像だけは無事だったところなど、被害はさまざま。

そこで、同会では今年3月に実際に気仙三十三観音霊場めぐりを行うなど2度の現地調査を踏まえ、どのような形で支援ができるのかを検討。6月に開かれた総会で「気仙三十三観音霊場巡礼再興プロジェクト」の活動方針を正式決定した。

再興プロジェクトでは「巡礼マップ」再発行も計画

それによると、まずはじめに巡礼マップを発行し、被災地の仮設住宅をはじめ札所などに配布する。2年前に陸前高田市観光物産協会で発行した『祈りの道探訪』に被災後の状況を書き加えたものを再発行する方向で準備を進めている。

また、気仙三十三観音霊場ホームページの作成、各札所の朱印作成なども計画。今後の事業目標として、ガイド本の出版、道しるべの整備、徒歩巡礼道の整備なども検討している。

同会の吉水岳彦(がくげん)さんは「つらい思いをしている方や、人生を振り返ってみたいという方々が訪れる場の存在は心のケアとしても大切。今後もさまざまな団体と連携して気仙三十三観音霊場を再興し、被災地域に住む人たちの寄る辺となる『祈りの道』を再生したい」としている。

【気仙三十三観音霊場】江戸中期の[illegible]年(1718)、[illegible]高田村の検断役[illegible]木三郎左エ門知[illegible]母の安楽追善供[illegible]め、郡内で観音[illegible]置する主な寺社[illegible]所)を選定。知[illegible]の時、各札所に[illegible]も奉納している[illegible]の津波で陸前高[illegible]を中心に6カ所[illegible]が被災した。

多彩な催し満喫

BBQやコンサートなど

「3・11いわて教会ネットワーク」主催のサマーフェスティバルは30日、大船渡市猪川町の盛川河川敷で開かれた。

来場者はバーベキュー料理に舌鼓を打ったほか、マッサージ体験、ハープコンサートなど多彩な催しを満喫した。

同フェスティバルは「食べること、出会うこと、新しいことを楽しむ場を」と企画。猪川地区公民館、轆轤石地域公民館が後援し、事前に猪川小の児童らにチラシを配るなど協力した。

催しは猪川地区公民館近くの盛川河川敷で開かれ、多くの親子連れらが来場。

同ネットワークのスタッフは国内外から50人ほど参加し、各コーナーで来場者と交流した。

飲み物の無料提[illegible]ナー、マッサー[illegible]

心の拠り所〝復活願い

霊場再興プロジェクト 巡礼マップ、HP作成も

ひとさじの会

被災地住民の〝心の拠り所〟復活を願い、東京都内の僧侶らでつくる団体が気仙三十三観音霊場の再興プロジェクトを立ち上げた。霊場の中には津波によって壊滅的被害を受けたところもあるが、被災地に住む人たちの寄る辺となる「祈りの道」を再生することで、心の支援につなげたい考え。第1弾として巡礼マップの発行やホームページの作成に着手する。

この団体は、社会慈業委員会「ひとさじの会」(東京都台東区、会員30人)。食べるのに困っている人へほんの一匙(ひとさじ)の重湯(おもゆ)を差し出すような支援や、寄り添いたいと想う僧侶たちで平成21年に設立した。主に地域社会やNPO団体と協働してホームレス支援など社会的弱者の支援活動を行っている。

同会では、震災発生から1年以上にわたり大船渡、陸前高田などの避難所や仮設住宅で炊き出しや子ども会などの支援に携わってきた。

その中で「亡くなった人に祈りをささげる場がほしい」「心静かに手を合わせ、ほっとできるところがほしい」などといった声が聞こえてきた。

活動を通して観音堂の存在が、地域の人たちの心の拠り所だったことが分かった会員たちは「その声はもともと日常の中にとけ込んでいた〝祈りをささげる場〟を求めている声ではないかと直感した」という。

気仙地方では古くから気仙三十三観音霊場の巡礼が行われており、地元に親しまれている。観音霊場の中には、津波によって堂宇や伽藍に壊滅的な被害を受けてしまったところ、幸いにして観音菩薩像だけは無事だったところなど、被害はさまざま。

そこで、同会では今年3月に実際に気仙三十三観音霊場めぐりを行うなど2度の現地調査を踏まえ、どのような形で支援ができるのかを検討。6月に開かれた総会で「気仙三十三観音霊場巡礼再興プロジェクト」の活動方針を正式決定した。

再興プロジェクトでは「巡礼マップ」再発行も計画

それによると、まずはじめに巡礼マップを発行し、被災地の仮設住宅をはじめ札所などに配布する。2年前に陸前高田市観光物産協会で発行した『祈りの道探訪』に被災後の状況を書き加えたものを再発行する方向で準備を進めている。

また、気仙三十三観音霊場ホームページの作成、各札所の朱印作成なども計画。今後の事業目標として、ガイド本の出版、道しるべの整備、徒歩巡礼道の整備なども検討している。

同会の吉水岳彦(がくげん)さんは「つらい思いをしている方や、人生を振り返ってみたいという方々が訪れる場の存在は心のケアとしても大切。今後もさまざまな団体と連携して気仙三十三観音霊場を再興し、被災地域に住む人たちの寄る辺となる『祈りの道』を再生したい」と話している。

【気仙三十三観音霊場】江戸中期の享保3年(1718)、気仙郡高田村の検断役・佐々木三郎左エ門知則が父母の安楽追善供養のため、郡内で観音像を安置する主な寺社(33カ所)を選定。知則はその時、各札所に御詠歌も奉納している。今回の津波で陸前高田市内を中心に6カ所の札所が被災した。

多彩な催し満喫

BBQやコンサートなど

猪川町で

「3・11いわて教会ネットワーク」主催のサマーフェスティバルは30日、大船渡市猪川町の盛川河川敷で開かれた。

来場者はバーベキュー料理に舌鼓を打ったほか、マッサージ体験、ハープコンサートなど多彩な催しを満喫した。

同フェスティバルは「食べること、出会うこと、新しいことを楽しむ場を」と企画。猪川地区公民館、轆轤石地域公民館が後援し、事前に猪川小の児童らにチラシを配るなど協力した。

催しは猪川地区公民館近くの盛川河川敷で開かれ、多くの親子連れらが来場。

同ネットワークのスタッフは国内外から50人ほど参加し、各コーナーで来場者と交流した。

飲み物の無料提供コーナー、マッサージのブースを設置した。

手作りソーセージのコーナーでは、来場者らがソーセージを炭火で焼き、出来たてをホットドッグなどにして舌鼓。

子どもたちは口いっぱいにほお張り、「おいしい」と笑顔を浮かべた。

またハープミニコンサートも開かれ、同ネットワークのスタッフがきれいな音色を披露。聴衆は目を閉じながら耳を傾け、終演後は大きな拍手を送った。

立根小1年の北條慎治君は「人がいっぱいいて楽しかったです。またイベントを開いてほしいです」と話していた。

社団法人・日本家庭園芸
て〝お色直し〟した。
でなく、シルバーリー
17年以上フラワーロ